

漁書雜録

村田 全

中学の頃の英語の問題集にこんなものがあつた。「蔵書を受けつぐのはいい事だが、一つずつ集めるに如くはない。後の場合には、他人の目は書棚をスラスラと走るにしても、集めた本人にとって一々の本は夫々個性それぞれをもち歴史をもっている。」

確かに他人目には貧弱であり無系統であるかも知れないが、私の蔵書は私にとっては殆んど最上のものであり、又それなりに系統も立っている。本を一つ一つ手にとってみると、探した時、見付けた時、買った時、読んだ時、凡そその本に関係のある出来事が些細な事迄、いや寧ろ些細な事程一層の懐しみをもつて胸に蘇つて来るのである。それのみではない、その一系の本の列は又私自身の歴史をも物語っている。「人はその持つている繩の長さしか井戸の深さは測れない」という事は洵まことに真実である。ある時代に私の漁つた本はそのまま当時の私の「繩の長さ」を表わしていると云つてよい。私は遠く過ぎ去つた心の故郷を偲おもふまなざしを以て、手垢によごれ今は埃の色も見える当年の愛読書を眺めるのである。

本というと先ず忘れられないのは芥川の全集である。よきにつけ悪しきにつけ、私の書物に対する眼を開いて

くれたものは芥川であった。国語の教科書にあった「蜘蛛の糸」にひかれて、新潮文庫の「傀儡師^{くぐつし}」を買ったのは何時だったか、今は神戸元町の宝文館の隅の文庫棚と、あの頃その辺りの夕暮れと微かに覚えている丈となったが、それを買った帰りに、車中読みふけて二停留所ばかり電車を乗りすごした程面白かった。それからは丹念に『現代日本文学全集』の芥川集（改造社刊『現代日本文学全集』第三十卷「芥川龍之介集」昭和三年のことか）を読み、「侏儒の言葉」を読み返し、芥川に関する評論もぼつぼつ集めて一かどの芥川通、否、寧ろ文学通に迄なつた心算で揚句の果てに探し始めた彼の全集ではあつたが、もうそろそろ本のなくなりかけた頃で仲々見付からなかつた。中学も四年の末で入学試験を間近に控えながら、息抜きという口実の下にあちらこちら探し廻つた。一月といえば神戸でも寒い頃だが五時頃に立ちよつた六甲道の本屋南天荘で、それをもっている本屋を教わると矢も楯もたまらなくなつて、廻れ右をして家と反対の方向へ、御影書房といつたその本屋迄尋ねて行つた。明るい電燈の光の下で棚の上に並んだ十冊の『芥川龍之介全集』（昭和九年から十年にかけて岩波書店が刊行した『芥川龍之介全集』全十巻のことか）という金文字を見上げた気持は忘れられない。それから本は色々買ったが、あんなに嬉しかつた事は数える程しかない。

「㊦（日中戦争期での物価統制令によつて決められた公定価格の俗称）は二十円ですが、高うに買つたんで二十五円ながしで買つて下はい」
 という主人の言葉など問題ではなかつた。よく

「二十五円か三十円でも。」

などと余計な口をきかなかつたと今でも時折思ふ事がある。勿論二つ返事で買つ事にした。日迄覚えている昭和十五年の一月十日の事だ。その日は父兄会で、丁度その時分は母が学校で、三高（今の京都大学の前身。旧制第三高等学校）は一寸ちよつとむずかしいかも知れませんが、などと先生にいじめられて居た頃であつたらうか。息子は本で有頂天になっていた。フロア

ベルの全集も横にあつたが、別に欲しいとも思わずに眺めていたら、親爺が

「そないに買う詮議ばかりせんとちつと売つても下はい」

と云つた。他に一冊「コモン・センス・オブ・ソウシヤリズム」という本があつて手にとつて見たが、又その親爺さんが覗き込んで

「中学生向きの本ですな。」

と云つたのが厭になつて、そのまま置いて来た。自惚れ丈は当時から随分強い男であつた。あれが

「高等学校、大学程度です。」

とでも云つていたら、案外買つていたかもしれない。それから少時その親爺さんと話をして、その人が私の中学の先輩である事や、素人商売で儲からんという愚痴なども聞かされ、勉強しなはいよ、という忠告迄貰つて別れたが、二年程して又々本漁りにその辺迄行つて見たら、その店はいつか下駄屋になつて、針金に吊るされた赤塗りの子供下駄が風にゆつくり廻つていたのを思い出す。

芥川で私の眼は急速に覚まされて行つた。尤も初めは芥川の眼でしか物が見えなかつたので、読むものは世紀末か社会科学ばかり。ボードレエルは遂に解らなかつたが、ストリントヴエリには随分凝つた。一方社会科学にも関心を寄せたが、今思えば畢竟お坊ちゃん（うつけい）の我儘という感じでしかない。要するに私には人生というものはむずかし過ぎて手に負えないという諦めに似た気持がその頃からあつたのだ。私はそれを弱いと思ひ清算しようと努めるのだが、今でも、ともすればこの激しい浮世の荒波を逃れて、静かに自分の生活を培いたいという欲求を否めない。

話を本に戻して、今一つ忘れえぬのは『三太郎の日記』(阿部次郎著。阿部次郎が自己の思索の記録を青田三太郎に仮託して告白的に綴ったもの。大正三年刊行。大正・昭和前期の青年知識層の愛読書で、大きな影響をあたえた)である。あの始めに出てくる「断片」というのが、之も始めは円本(一九二六(大正十五年)、改造社が『現代日本文学全集』を定価一円で刊行し、その後一冊一円の叢書本が流行した)で読んだのだが、余程その頃の私の心をうったと見えて、一時は私の書く文章が皆それ式のものになっていた。之を単行本で始めて見付けたのは芥川全集に夢中になった半年ばかり前、所は神戸の大丸であった。そこでそのまま買っておけば、後三年もその本を探しまわる事もなかったのだが、幸か不幸か偶々開いた頁の上に、Qという男は挨拶状をやつても返事もよこさぬ、という様な事からその男の悪口とその時の私には思えたが書いてあつたのを見て、何だこんな本かという気になった。あんな深かそうな事を云つても、人の誹謗などを本に載せる様じゃ俺より浅ましい、そんな事迄思つて、母が傍から、

「お買いなさいお買いなさい」

と云つてくれるのに

「こんな小さな本で、下らない事も書いてるのに、二円八十銭も馬鹿馬鹿しい。」

といった調子で、結局買わずに帰った。当時の物価と中学生の財布には二円八十銭も大金ではあつたらうが、結局その時の私の「繩の長さ」は、その誹謗の中の真情も、それを敢て載せた阿部さんの理想も、遂に測るに足らぬ程度だったのだ。それを思えばその時買わなかったのは寧ろ幸福しあわせであつたかもしれない。その日はよくよく本に縁がなかった日で、この『三太郎』の隣りには『回想の寺田寅彦』(小林勇編『回想の寺田寅彦』昭和十二年刊行)があつたのに、之も買う心算で頁を開いたら、丁度、食事何々、熱何度、大便何回等という看護婦か誰かの書いた先生の病床日誌が出て来

た。まだ芥川に懸命で聊か人間嫌悪の時代、「春雨や人間の子は浅ましき」という川柳とも俳句ともつかぬものを作って一応深刻がっていた時であったから、途端に厭になつて嘆息と共に放り出した。この本は未だに手に入らず、偶然あの頁にはさまつた人差指が今でも恨めしい。

その後私のも一度『三太郎の日記』を見付けた。京都へ入学試験に行つた時で、その頃の京都の本屋はどこへ行つても『三太郎』が積み上げてあつた。その時はもうこの本の本当の値打ちも朧ろげながら解つていたし、懐には二円八十銭に辟易しない位の金もあつたのだが、人間の心理というのは不思議なものである、余り沢山で積極的に買おうとする氣を失つてしまつた。之なら神戸でもあるだろうという氣もあつたらしい。

入学試験の方はどうせ落ちると諦めていたので、あちこち本屋ばかり廻つて見たが、特に記憶に残る程のものもない。ただその時の宿が或る三高の文科生の部屋で、部屋一杯の本を見て実に羨ましかつた。一、二冊ぬき出して読んでもみた。『侏儒の言葉』があつたので之も引き出してみたら、一番後の頁に「思想の飛躍、俺には解らん。」と書いてあつて、あの本を相当「理解」した心算の若い頭にオヤオヤという感じを抱かせた。一体この人は俺より進んでいるのか、遅れているのかと真面目に考えた事を思い起すと苦笑させられる。尤もその時はその素晴らしい本箱に圧倒されて、屹度も少し考えると又解らなくなるのだらうと解釈してケリをつけたと記憶する。こんな事や本の多少はどこぞ本当にどちらでもいい事であつた。凡ては、本と芥川とで人間の一切を判定しようと思つていた頃の事である。尤も私が本箱の台に雑誌を敷く事と、文庫本等に番号をつける事、日付、購入先を書き入れる事等を覚えたのは確かこの人の本箱からである。又因に番号をつけた岩波文庫の第一号は、その時買つて歸つたジムメルの『断想』(清水幾多郎訳、昭和十三年)である。試験も終つて神戸へ歸つたが、案に相違して、『三太郎』はなかつた。

然し、だからといって別に京都迄買いに行く程の気もしなかった。唯々京都へさえ行けばあの本はいつもあるものと思っていたので、来年、も一度受験に行った時に買う心算であった。又それ位沢山の『三太郎の日記』がその頃の京都にはあったのである。

中学の五年時代は同じ暗中模索の中にも、次第に手ごたえの出て来た頃であった。トルストイの民話やジャン・クリストフ、日本では倉田（倉田百三、『愛と認識との出発』は当時のベストセラー）さんや山本有三さん、一方随筆を通じて寺田さんを識り、安倍（安倍能成、哲学者、教育家。戦後（文部大臣、学習院長を歴任した））さんや河合栄治郎（社会政策学者・評論家。自由主義者として非難され東大教授を休職した））さんを慕う様になっていた。自然科学への眼が開けて来たものもこの頃であつたらうか。その頃の日記を読み返して見ると、その口調は相変わらず芥川流の暗澹としたものではあるが、書棚を通して見るその頃の私は、丁度一生のルネッサンスの始まりともいべき時であつた様に思われる。そしてそれと共に例の『三太郎の日記』も一層欲しくなつたという訳である。

私ほも一度二つの期待を持って京都の土を踏んだ。一つは勿論入学という事、も一つは実に『三太郎の日記』であつた。然し結果は二つとも見事に裏切られてしまった。試験二日目の数学で失敗した夕方、同じく得意の国語で失敗した親しい友と二人、せめてもの『三太郎』と丸太町の辺りを探ね廻つた。『三太郎』はやはり見付からなかつたが本は三冊買った。古ぼけた寺田先生の『地球物理学』同じ位古ぼけた横文字のアンデルセン、今一つは小泉信三さんの『師、友、書籍』。小泉さんの本を買つたのは、その頃読み耽つた同氏の『近代社会思想史大要』の余波であつたか。その本を二人で分け持つて

「俺は本をこう持つて歩くのが好きや、お前もやれよ。」

と聞いて、私はアンデルセンと寺田さんを

「どうか？」

と、その手付きを真似ながら彼は小泉さんの本を一冊、小脇にしつかりとかかえこんで、暮れてゆく御所近くの道から加茂川にかかる荒神橋という橋を渡って、そば降る雨に傘もささず去年と同じ宿へ帰って行ったが――。流石さすが

にその夜、心は晴れなかつた。こちらから慰むべき彼に慰められながら、涙はどうしても禁じえなかつた。その年は理科生の部屋に泊ったので、気晴らしにとその人の本箱から『物理学はいかに創られたか』(アインシュタイン、インフェル)

を引き出したものの、その夜はちつとも面白くなかつたが、それら一切は時の隔たりに浄化されて、思い出の一つ色に懐かしい。その友達の事をいえば、その二、三日前、吉田山の麓で、彼と半分ずつ金を出し合つて買った、

『大和古寺』(井上政次著『大和古寺』日本評論社、昭和十六年のことか)の事も思い出す。何故そんな変な事をしたかは思い出さない。今となつては我々

の間に、その様な何か共同の持物でも持ちたいという甘い友情の時代もあつたかと思うのである。尤もそれから二年後の同じ頃に同じく彼と嵯峨に旅した帰り、所も同じその中西屋で仲よく二冊ずつ本を買つたのも、どんな気持ちで？といわれると返答に困る。その時も『西の京』(田中重久著『西の京』近畿観光会、昭和十六年のことか)という『大和古寺』系統の本を一冊ずつ、その他に彼は音楽の本を、私はウイーン学派の『統一科学論集』(モリーリッツ・シュリック他著・篠原雄訳『統一科学論集』創元科学叢書、創元社、昭和十七年)を。彼は今どうしている事か。晴につけ、雨につけて、中支にある彼の身を思うのである。

さて、然ししか、この京都市の前後には忘れえぬ本が集まっている。落漠たる心で三宮へ戻つた時、駅のすぐ傍の書店で、出たばかりの湯川(樹秀)さんの『極微の世界』を見付けたのは嬉しかった。一方試験の方も思いがけずに一次はパスして復た京都へ行く事になつたが、二次試験の最中には相当拾い物があつた。中でもある古本屋では、古

い初版か二版の『藪柑子集』(寺田寅彦が吉村冬彦名義で刊行した隨筆集)と共に、生田長江の『ニイチエ全集』十二冊がぼんと並んでいた。感激の余り女学生相手に商売をしている番頭に向つて

「あのニイチエ、売つてくれますか、ネエ、あのニイチエ——」
と云つた所が

「順番を待つて下さい。」

とむつとり答えられて、女学生の手前も恥かしく一寸むつとしたが御氣嫌を損じて売らんと云われれば大変だし、現にそんな経験もあつた事とて、成程こちらが悪かつたと思ひ直して、そのニイチエの前を行つたり戻つたり行つたり戻つたりした。三回か五回往復したら、やつとその番頭さんがやつて来て

「今朝市で買うて来て、一時間程前に並べたばツかりだす。」

と聊かの京都なまりを交えながら柵から下してくれた。その日も小雨でそう云われて時計を見たら三時頃であつたのも覚えてる。それはまだ試験最中で、天下太平だったが、結局三月十六日の本当の発表には落とされてしまった。買ったばかりの『極微の世界』を例の通り小脇にかかえて発表を見に行つた迄はよかったが、落ちついて読む心にもなれず、発表は徒らに遅れるばかり、業を煮やして又々本屋を廻つたら、吉田山の北側で『アインスライン全集』(石原純他訳『アインスライン全集』(全四卷、改造社、大正十二年〜十三年))の第四巻を見付けた。その二冊の本をかかえて空しく発表の紙の前に立つたのは昨日の事の様な氣持がする。そうそう発表をみた帰りにも本屋へよつた。實際その時の、一つの裸電燈に照らされていた薄暗い店は打ちひしがれた私にとつてオアシスの様な感じがしたつけ。そこでは松井某という人の『ボードレエルの精神分析』という風な本があつた。それを手にとつて買うか、買うまいか考えていた時、一

人の三高生が入って来て主人と『ワーグナー全集』(『ワーグナー全集』第一〜五楽劇)を売ろうとかいう様な交渉を始めた。

「何メートルで買った？」

と主人がきく。

「九メートルさ。」

成程一メートルは百センチ(センチ＝錢。百錢は一円。したがって九メートルは九円のこと)だと私は頭の中で考えている。

「書き込みなんかしなかったらうな？」

と主人。するとその男は、蔑んだ様な口調で

「詩に書き込みしたって、仕様しやない。」

と云いすてた。その「仕様しやない」が耳にのこって、私はとうとうそのボードレエルの本を買わなかったが、それから長い間その「仕様しやない」は耳から放れなかった。

浪人の間もずっと『三太郎』は探して見たが一向に見付からなかった。ただ長い間貸してくれた人があって、解る所は大抵この時に読んでしまった。そういえば買いそこねた本の思い出も、この頃に一つ二つある。一つは『哲学以前』(出隆著、格好の哲学者、門書として版を重ねた)で一つは『カントと現代の哲学』(桑木巖著)である。前の方は行きつけの古本屋にあった。

「とってくれというので、とってはありますが、三日になるにとりにも来ませんし、別に義理のある客でもごわせないので、お持ちなすってようござんす。へエ」

とは老店主の言葉だったが、変な同情をして

「僕も置いて貰って、用事で遅れた経験もありますから、まあも一日とってあげて下さい。」

といつて帰ってしまった。翌日行つてみたら、やはり昨夕にとりに来たとか

「又出ますやろさかい、その時はとつときますです。へエ」

と、そのお爺さんは云つたが、その後之も余り縁がない。中味丈は借りて読んだから之はまあいい方である。空襲前迄はその本屋へもよく行つたが、その後どうなつた事か、聞けばその辺は焼野原となつてしまつたという。おぼつかない話である。

『カント』の方は余程口惜しかつたと見えて日記が残っている。昭和十七年の十一月十二日とある。

一昨日日文教書店で『カントと現代の哲学』を見付けた。買おうと思つたが解らないのにと思つてよした。今日迄はそれでよかつたんだが、今日『羞恥、同情、運命』(土井虎賀寿著(岩波書店、昭和十一年))を買つてから急にむらむらと欲しくなつた。

カントの認識論は一度は読まねばならないだろう。——科学をやる為に。その為に買つておくべきではなかつたか——

家を飛出した。祖父が横道の本でないなら行つてこいと云われた。横道とはヒダリ系という事である。

南の空が火事で赤かつた。僕は半ば走つて下へ下つた。藤田君に会つたら火事だと云つていた。僕はただ、本を買いに行くと言いつて去つた。然しふと思いついて公衆電話で聞いてみたら、やはりもう昨日売れたという事だつた。

帰り道、僕は半ば残念だつた。然し半ば変な気がした。——又読めもしない本を買いだめするという、罪に似た気持ちに苦しめられずに済んだので……

帰りがけに、風呂へ入って上ったらもう火事は煙丈になっていた。も一度楽な気持ちになって、星の一杯き
らめく北の空を見上げながら家へ帰った。

この日記は之で終りだが、之を探す時見たらそのすぐ前に

「永遠に続くものはない。然し『永遠につづくものはない』という事実が或は永遠に続くものかもしれない。」
という記事があつて、ともすればそういう事を云いたがる今の私と比べ合せて、人間、ちつとも変らないとい
う感を深くする。然ししかそう云える一面に又少しづつでも成長しているとも思えるのは、やはり楽しい事である。

こんな事を書いていると際がない。浪人時代には特に、本がなくなりますよ、という本屋の主人の忠告？を容
れて随分色々の本を買った。今になってみると、その時買っておけばと思う本もないではないし、下らない買
いものもしてはいるが、大抵理科系の本だったので大いに役に立っている。その中でも寺田先生の『全集科学篇』
(『寺田寅彦全集 科学篇』全六冊 岩波書店、昭和十一、十四年)を本屋に頼んだら、一週間程の間に四冊丈揃えてくれたのは、今の『カント』の前だつた
か、後だつたか。本屋は同じ文教書店であつた。それからこの頃、も一つ思い出しておかしいのは、俳諸の本を始
めて買った時の事である。私は昔から俳句が好きで、作るのは一人で作っていたが、俳句関係の本は殆んど読ま
なかつた。俳句作法というのには価値は認めるのだが、頭から嫌いでもまだ読んだ事がない。然ししか、ふとした機会
で連句というものを知つて、之には興味を唆られていた。ある日友達と本屋へ行ったら、岩波文庫で『芭蕉七部集』
があつたので之は買う事にした。更に見てゆくと棚の上の方に『炭俵・続猿蓑』(幸田露伴著『炭俵・続猿蓑抄』(岩波書店、昭和五年)、のち『芭蕉七部集評釈』に収録)と
書いた菊判の本が二冊丈並んでいる。炭俵や続猿蓑が何者かを知つたのはほんの四、五日前の事であつたが、何、

かまわないと梯子を登ってとつて見たら、著者は幸田露伴で、出版は岩波、之なら大丈夫という訳でカウンターへ差出した。中学生がそんなものを買う不思議でもあったのか、その番頭さんは一、二度怪訝な顔をして私の顔とその本を見比べたものである。その時の彼の顔は、私よりも一緒にいた友達にとつて余程面白かったと見えて本屋を出てからわざわざ自分の口をあけて真似をしながら何度も

「あいつ、ポカーンとしとつたな、こんなして」(と身振りをしながら)「へー、ちゅうた様に、お前の顔見とつたぞ。」

と云っていた。その友達も本の好きな男であるが、兵隊に行っている内に家と共にすっかり焼いてしまった。復員したという便りがあつたが、せつせと集めた本を焼いた彼の心は私には十分に解る様な気がする。

予科へ入つてからも本は随分買った。然しこんな事は大抵本人に丈面白い事だし、この辺で切上げる事にする。唯々行きがかり上、探ねあぐんだ『三太郎』の落着く先丈はつけておく事にしよう。この本は予科一年の夏休みになつて、今の本好きの友達が心あたりがあるから、学校が始まつたら世話してやるといつてくれたので、之でやつと手に入ると安心した。処が丁度その交渉の最中に例の学徒出陣の令が下つて彼も出陣する一人となり、私の方はその興奮の為に『三太郎』の事迄忘れていた。而もその急迫した事態の中で彼は約束を守つて交渉を続けてくれ、結局彼の手紙に所謂「教練教科書の古ぼけた様な」代物だが「僕なら譲り受けん事もないです。」という風に時代物の『三太郎の日記』は久しい恋慕の後に、和辻(哲郎)さんの『倫理学』と交換で手に入る事となつた。寮での小包を開いた時は勿論嬉しかったが、彼への感謝を除けば、昔の芥川やニイチエや、其の代り全くのザコにでも感じた様な胸ふるえるという感のなかつたのは、自分の手で釣れなかつたからか、興味が薄れていたから

か、長い手さぐりにあきていたからか、それともそのどれでもなく、私もそれ丈大人になっていたせいであろうか。何れにしても、殆んど無感動に本を買う傾向が近頃尚一層ひどくなつたのは、顧みて確かに淋しい事である。友達も少く、又さ迄他人との交際に期待を繋ぐがぬ私にとつて書物は洵まことによき友であり、よき師であり、それ丈又一方本漁りには恵まれていたと自分でもよく思う。適当ない本が夫々それぞれ適当な時期に手に入ってくる事を、云い換えれば、他人に誇れる様なものではないが、少くとも自分自身に対して悔ゆる事のない蔵書を持ちえた事を、何者かに感謝したい気持ちにすらなる。私はアインシュタインの様に本を沢山もたない学者も尊敬するが、私の生活からやはり本は切りはなせない。本は私にとつて消えうせた過去の日の残照とも見えるし、又来らんとする新しい日への希望でもある。洵まことに初めに掲げた通り、個々の本は他人は知らず、各々その個性をもち、歴史をもち、そしてそれらの本を並べた全体は慎しまやかに、又ありのままに我が個性の成長の歴史を納めてくれる。本は私には半身の如く近く、恋人の如く懐かしいものである。

(一九四五・一二)

之は、嘗てあてもなく書き流してそのままになっていた雑文である。一日一日は長いのに、いつの間にかこんな時がたつてしまったという思いである。古本を恋人の如くに慕っていた私の姿は、今となつては苦笑ものだが、今でも美人等というものを別格とすれば、やはり本には執着がある。案外読まぬものだど悟りはじめた点で、未練は数々あるといいなおしてもよい。漁書雑録は必ずしも読書雑録ではなかつたのである。

(一九五三・五・一六)

-
- 初出は『高崎文芸』第二号である。村田全先生が立教大学を定年退職するにあたり開催された「村田全教授定年退職記念会」で頒布された小冊子に収録されたものを底本とした。
 - PDF化するにあたり、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、いくつかの語句について割注をつけた。
 - 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。

村田全氏のその他の著作については、

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

に収録してあります。

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。